



TITLE:

外國文献

AUTHOR(S):

CITATION:

外國文献. 日本外科宝函 1927, 4(3): 485-488

ISSUE DATE:

1927-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200047>

RIGHT:

手術後ノ排尿障礙

Die postoperative Harnverhaltung als Symptome der allgemeinen postoperativen Krämpfbereitschaft und ihre Behandlung durch Säuretherapie. von Dr. A. Jalowitz.
Mittheilungen aus den Grenzgebieten der Medizin und Chirurgie 40, Band. Heft 1. S. 34, 1926.

術後ノ排尿障礙ハ如何ニシテ起ルノデセウカ。

一般ニハ手術操作前ニ準備トシテ與エテ居ル「モルヒネ」ニ基ツク膀胱括約筋ノ痙攣ニ依ルモノトサレテ居マスガ、此ハ誤リデアリマス。假ヘバ、術後ニ排尿困難ヲ訴ヘル患者ハ極メテ僅カデアリ、マタ、「モルヒネ」ノ作用ガ既ニ消失シタト思ハル、數日ニ亘ツテ排尿障礙ヲ訴ヘル者ノアルコト。更ニ「モルヒネ」ヲ全然用キナイ手術後ニモ起ルコト。マタ更ニ鎮痛ノ目的デ「モルヒネ」ヲ屢々用キ、恐ラクハ手術準備ノ爲ニ用キルヨリ以上量ニ用キテモ排尿障礙ヲ訴ヘナイ者ノアルコト。等。特ニ後二者ノ事實ヲ考エマスト手術ト云フ事自體ガ、其ノ原因デアラナバナリマセス。

一、抑々手術後ニハ細胞ノ破壊現象ガ嵩ル結果、全組織ノ酸「アルカリ」平衡(Säurebasegleichgewicht)ガ破レ「アルカリ」性ガ勝ツタメニ凡テノ神經筋肉器關ハ過敏症トナルノデ、斯クテ膀胱括約筋ノ痙攣モ起ルノデアリマス。私ハ此ヲ Spasmodischer Sphinkterkrampf ト名ヅケテ居リマスガ、ソノ程度ハ個人ニ依ツテ異ルモノナノデアリマス。然シ凡テノ排尿困難ハ此デ説明出來ルモノデアリマセン。

二、膀胱附近ノ手術ノ際、コレヲ假ヘバ、直腸、肛門等ノ手術ニ當ツテ直接

括約筋近クノ組織ヲ損ネルタメカ、或ハ「ガーゼ」、「ゴム」管等ノ挿入異物ノタメ反射性ノ括約筋痙攣(Reflextonischer Sphinkterkrampf)ヲ起シテモカ、ル現象ガ起ルノデアリマス。コノ際ハ手術ニ依ツテ加エラレタ組織ノ刺戟ガ無クナルカ、挿入異物ヲ除去スル迄續クモノデ、痔ノ手術ニ際シ挿入「ゴム」管ヲ取り去ルト終日續イテキタ排尿障礙モ去ルコトガアリマス。

三、次ニ精神的原因ニ依ルモノガアリマス。是ハ神經質ノ患者ニ多ク、普通行ハレテキル括約筋及ビ排尿筋間ノ協同運動(Koordination)ニ障礙ノ起ツタ爲ニ生ズルモノデ、タトヘバ、慣レナイ背臥位ノマ、デ小便ヲヘルトカ、病舎ノ多人數ノ前デ公然ト小便シナケレバナナイトカノ爲ニヨク起ルモノナノデス。是ヲ豫防スルタメニハ手術前數日、背臥位ノマ、デ小便ヲスルコトヲ練習サセルカシテ、マタ病舎ニモ慣レサスノデス。然シ、既ニモシ此ノ現象ヲ訴ヘテ居ルモノデシタラ、暗示療法ニヨリ、害ノナイ膀胱ノ上ニ懷爐ヲ置ク等ノコトヲヤツテミルノデス。

又特ニ、婦人病舎デハ流行性ニ排尿障礙ヲ訴ヘルコトガアリマスガ、コレハ「ヒステリー」ノ婦人ガ他人ヲ模倣スルノデアリマシテ、コノ様ナ患者ニハ暗示法ガ一番ヨイノデアリマス。

Spasmodischer Sphinkterkrampf ニ依ルモノニハ酸性ヲタカメルタメニ鹽化「アンモニア」ヲ與ヘルノデス。コレニヨリ血液ノ尿酸瓦斯壓力ニ變化ヲ來シ、痙攣ハ緩和サレテ行キマス。

鹽化「アンモニア」ハ術後十二乃至二十四時間後デ膀胱ノ充滿度ガ相當ニ達シタ時經口のニニグラム或ハ直腸カラソノ倍量ヲ一時間毎ニ與ヘルノデスガ、著者ノ經驗ニ依レバ一乃至二時間遅クテ三乃至四時間デ尿ハ排出サレマシ

タ。

然シ皆ガ皆此ノ三型ノ何レカニ當テハマル型デ來ルノデハナク三者ガ相混ジテ現ハレ得ルノデスカラ、投藥シテ居ナガラモ懷爐ヲ置イタリシテ暗示ヲ與ヘルットガ良イノデアリマス。(青柳)

メツケル氏憩室潰瘍

Ulcer of Meekel's diverticulum as a cause of intestinal haemorrhage. by Arnold S. Jackson

(Annals of Surgery, Feb. 1927)

十四歳ノ少年。四日前未熟ノ林檎ヲ食シテ以來、腹部全體ニ亘ツテ痙攣性疼痛ヲ覺エ、第三日ヨリ頑固ナル強度ノ腸出血ヲ來シ、高度ノ貧血ニ陥ル。發熱、嘔吐等ナシ。他覺的ニハ唯腹部ノ右下ニ輕度ノ壓痛アルノミニシテ、其他ノ疾患ニ適合スル所見ヲ認メズ。輸血、葡萄糖「インシュリン」注射等ノ應急處置ニヨリテ、一般狀態ノ略回復スルヲ待チ、約一週間後ニ開腹手術ヲ行ヒタルニ廻盲辨ヲ卷ル四〇糎上方ニ、巾三糎長サハ糎ノメツケル氏憩室アリテソノ先端ニ近ク潰瘍アリキ。他ノ腸管ニハ異常ナシ。

最後ニ著者ノ意見トシテ、子供コトニ男ノ子ニ於テ他覺的症狀ノ少キ怪シキ腸出血アル場合ニハ、本例ノ如キメツケル氏憩室潰瘍ヲモ一應念頭ニ浮ベテ見ル必要アリト述ベタリ。(荒木)

股動脈交感神經ノ化學的遮斷

Die Sympathikodiaphoretase (Chemische Sympathikus-
anasthesie) an der Arteria femoralis.

Von Dr. Karl Doppler.

Medizinische Klinik, 17th. Dez 1926, S. 1354.

Jaloulay, Leriche ニヨル交感神經切除ノ聲價ガ漸ク衰ヘントスル今日ニ

於テモ血管ノ痙攣的素質ガ主因ト考ヘラル、疾患ニ對シテ、交感神經延テハ血管收縮神經ヲ損傷セシメ依テ動脈性充血ヲ喚起シ、該當局部ノ營養ヲ良好ナラシメントスルノ構想ハ至當ナルモノデ、特ニ胃手術ニ於テ重要ナルモノガアル、即チ胃潰瘍ニ於テ左胃動脈ノ交感神經切除ヲ併用スレバ、創面ノ治癒ヲ促スノミナラズ、消化性小腸潰瘍ヲ防グ。且又潰瘍原因ヲ交感神經過敏ニアリトスレバ原因療法デアル。此構想ノ正鴻ヲ得タルハ Winkler、Wilauer ニヨリ證セラル、所デアツテ著者ハコレヲ試ミントスルモ徒ニ手術時間ヲ延長シ、血管錯雜シ實現ハ困難デアル。茲ニ於テ化學的藥品ヲ以テコレニ代用スルノ考ニ至ツタ。

即チ選擇的ニ神經ヲ侵ス様、且害サレ易イ無髓神經ナル交感神經ニ浸潤スル樣濃度ヲ考慮シテ七%ノ Phenol ノ水溶液ヲ用フルニ至ツタノデアル。動物試驗ニヨルニ家兎ノ腎莖 (Nierenstiel) ニ用ヒテ局所又ハ腎實質ニ何等ノ變化ヲ起サズ全身中毒ヲモ證シ得ナイ。

本法ヲ股動脈ニ用フル手技ヲ述ベンニ、股動脈ヲ十五糎許 Art. profunda femoris ノ分枝部ノト部ヨリ内轉筋管部 (Adduktorensehne) 迄露出シタル後、N. Iliolumbarialis ヨリ來リ股動脈外層ニ分布スル交感神經枝竝ニ N. saphenus ヨリ來ルモノニ及ボス爲ニ A. prof. fem. ノ分枝部ノ上部ヨリ塗布シ始ム。カク廣ク露出スル場合ニハ他部ヨリ來ル交感神經枝ヲモ侵シ得ルノミナラズ骨テ唱ヘラレタル N. saphenus ノ切除ヲ行フニ及バナインデアル。血管被膜ヲ開ク場合ニハ血管ヲ粗雜ニ把ミ内層ヲ傷ケテハナラヌ。文献ニ見エル血管閉塞ハカル事ニ原因スルト考ヘラル。最モ重大視スルノハ自家脈管 (Vasa vasorum) デアル、特ニ老衰性脫疽ニ於テハ増加シ擴張シテ居ルモノデ手術的交感神經切除ニ於テハ機性ニ供サント得ナイノデアルガ本法ニヨレバカル必要ハナイ。且又側枝ヲ結紮スルノ必要ガナイ。コレ又側血行トシテ必要ナモノデアル。

血管自身ノ所置トシテハ充分ニ Isophenol (著者ハ目下本品、即 Phenol-

trikresolisomerenmischung, (chemische Fabrik "Norgine," Drogen-Anstalt) ヲ塗布シ餘分ニ滴ツタ液モ其儘創中ニ殘スノデアル。カクテ何等ノ副作用ヲ見ナイ、多數ノ例ニ於テハ直チニ脈搏ヲ喚起シ小時間脚部ニ充血ヲ見ル、此充血ハ依然脈搏ハ繼續セルニ不拘管壁收縮ノ爲ニ少時間ニシテ消失シハ乃至廿四時間ニシテ眞性ノ動脈性充血ヲ起シ來ル。カクテ蒼白ナリシ脚ハ微赤色ヲ呈シ温度上昇シ疼痛ハ多クハ廿四時以內ニ至リ潰瘍ハ數日ニシテ治癒ス。著者ハ數例ノ良好結果ヲ收メタル症例ヲ付加ス。(神部)

尿道下裂ノ尿道形成ニ虫様突起ヲ用ヒテ

Use of Appendix vermiformis in the formation of a Urethra in Hypospadias.

By Stuart McFuire, M.D. of Richmond, Va.

Annals of Surgery, Vol. LXXXV, March, 1927, No. 3.

尿道下裂ノ手術ヲ行フニ適當ナ年齡ハ七歳カラ十四歳ノ間デアリマス。

尿道下裂ノ如何ナル整形手術ヲ施行スルニモ以前ニ外尿道切開術ヲ行ヒ會陰部ニ於テ尿ノ排泄口ヲ作ツテオク事ガ肝要デアルト考ヘマス。此方法ニハ、

一、外尿道切開ヲ行ヒ、其部カラ膀胱ヘ「カテーテル」ヲ挿入シ、尿道ノ他端ニハ絹糸ヲカケ。「ガーゼ」片等ヲ挿入シ壓迫閉塞シテオク法、

二、會陰部ニヤ、長イ縱切開ヲ加ヘ尿道ノ粘膜ト皮膚ト縫合スル法。

以上ノ二法ガアリマスガ私ハ後者ノ方ガ都合ガ良イ様ニ思ヒマス。

手術ノ順序トシテハ、別ニ變ツタコトハナク。

一、陰莖ノ畸形ヲ矯正スルコト。

二、下裂ノアル部ニ新尿道ヲ形成スルコト。

三、新尿道ト固有尿道ヲ連絡セシムルコト。

デアル。新尿道ヲ形成スル前ニ充分陰莖ヲ延長シテオカネバナラマコトハ勿論デアリマス。

陰莖ノ畸形ヲ矯正スル方法ハ從來ノツレト同ジク、陰莖ノ腹側ニ一ツ、二ツ或ハソレ以上ノ横切開ヲ加ヘ之ヲ縱ノ創トナス様ニ縫合シマス。若シ皮膚ガ緊張スル様デアツタラ背側ニ是ト逆ノ手術ヲ行ヘバ宜ロシイ。

新尿道ヲ形成スル方法。コレニ著者ハ虫様突起ヲ用ヒヤウト云フノデアリマス。著者ハ一治驗例ヲ擧ゲテ之ノ説明トシテオリマス。

著者ハ約六ヶ月以前ニ陰莖ノ畸形ヲ矯正シタ尿道下裂ノ患者ヲ持つテ居リマシタ。其頃一婦人ノ子宮ノ手術ヲシタ際一ツノ虫様突起ヲ得マシタ。其虫様突起ハ長ク、太ク、且、丈夫サウデアリマシタ。其際コレヲ彼ノ尿道下裂ノ患者ニ用ヒテミタラトイフ靈感ヲ得タト云ツテ居リマス。ソコデ此虫様突起ヲ生理的食鹽水ニ浸シテオキ、尿道下裂ノ患者ニ麻酔ヲ施シマシタ。

虫様突起ハソノ尖端ヲ切斷シ、ソノ内腔ヲ生理的食鹽水ヲ以テヨク洗滌シ、第十一號ノ軟カイ「ゴム」ノ「カテーテル」ニトホシマシタ。次ニ小腸間膜附着部ノ反對側ニ於テ粘膜下組織ニ達スル縱切開ヲ加ヘ。漿膜及筋層ヲ「ガーゼ」ヲ以テ剝離シマシタ。此剝離ハ容易ニ出來マシタ。此際粘膜及粘膜下組織ヲ傷ハ無イ様注意シナケレバナリマセン。

此虫様突起ノ粘膜及粘膜下組織ノ管ノ末梢端ヲ「カテーテル」ト共ニ絹糸ヲ以テ縛リソノ一端ヲ短ク切りマシテ、他端ニハ針ヲ通シ之ヲ「カテーテル」ノ目カラ尖端ニ抜キ通シ、「カテーテル」ヲ曳ク便トシマシタ。

次ニ患者ニ背位ヲトラセ、陰莖ヲ腹部ニ持チ來シ正常ノ尿道ノ開口シテ居ル可キ部ニ小縱切開ヲ加ヘ、又尿道下裂ノ起始部ヨリ少シク末梢部ニ小横切開ヲ加ヘ。龜頭ノ創カラ小横切開ヲ加ヘタ部ニ向ヒ、「トロイカ」ヲ以テ皮下ヲ貫通セシメマシタ。針ヲ抜き、次ニ套管内ハ豫メ用意シテオイト虫様突起ノ粘膜及粘膜下組織ノ管ヲ覆ツテキル「カテーテル」ヲ通シ、套管ヲ拔除シマシタ。コレデ虫様突起ノ粘膜ガ望ンデキタ位置ニ持チ來サレマシタ。「カテーテル」ハ創カラ約半吋ノ部デソノ兩端ヲ切除シ、龜頭粘膜ト虫様突起粘膜、皮膚ト虫様突起粘膜間ニ縫合ヲ行ヒ、縫合部ニハ滅菌「ワセリン」ヲ塗布シテ

オキマシメ。

一週間ノ後「カテーテル」ヲ除去シマシタトコロ、虫様突起粘膜ノ兩端ニ於テ表在性ノ小サナ壞死部ヲ證明シタ丈、創ノ他ノ部ハ極メテ良好ナ狀態ニアリマシタ。

更ニ、三日ノ後第十二號ノ絹製尿道「カテーテル」ヲ以テ擴張ヲ試ミマシタ。此際新尿道内ニ何等ノ閉塞及狹窄ヲモ認ムルコトが出来マセンデシタ。

患者ハ間モナク機械ノ使用法ヲ會得シテ退院シマシタ。

六ヶ月ノ後ニ診察シタ時新尿道ハ完成シテ居リマシタ。ソコデ新尿道ト固有尿道間ヲ連絡セシム可ク整形手術ヲ行ヒマシタ。

追加討論。Dr. Huch II. Thout. ハ十九歳ノ「ネグロ」ノ juvenile type ノ尿道下裂ニ患者自身ノ虫様突起ヲ用ヒテ新尿道形成ニ成功シタ一例ヲ追加シマシタ。且「患者自身ノ虫様突起ガ用ヒラレナイ際ニハ、輸血ノ法則ニ從ツテ虫様突起ノ贈與者ヲ定ムルガヨカラシ」ト云ヒマシタ。

Dr. Isidort II. Morris. ハ婦人ノ尿道形成ニ虫様突起ヲ用ヒテ成功シタ一例ヲ追加シマシタ。

コレハ追加デアアリマセンガ、女子尿道ノ形成ニ虫様突起ヲ用ヒタノハ、已ニ西曆千九百十九年 Charles M. Posner. 氏ガ臨床例ヲ報告シ且コノ方法ハ Hypo-n. Eppispadia ニ應用シ得ルモノデアアラウト申シテオリマス。

Dr. H. P. Blair. 〳「自分ハ Homo-n. Heteroplastic ニ成功シタ例ヲ知ラナイ。本例ニハ much surprised ダ」ト申シマシタ。

著者ハ結辭トシテ申シマシタ。私モコノ例ニ於テ植皮ガ成功シタモノデアアルトイフコトヲ斷言スルコトニハ躊躇スル。或ハ虫様突起ノ粘膜ガ患者自身ノ上皮増殖ノ足場トナツタニ過ギナイノデアアルカモ知レナイシ、或ハ又機械的ニ長ラク擴張シテ居タコトガ刺戟トナツテ、龜頭粘膜及會陰部皮膚ノ上皮ガ延長シテ來タノカモ知レナイ。説明ハ如何デアアラウトモ。事實一例ナラズ三例マデモ尿ノヨク通ル新尿道ガ虫様突起ヲ用フルコトニ依ツテ成功シタノデアアリマス。(盛)

癌腫ノ轉移ニ就テ

Zum Problem der Krebsmetastase
von Dr. K. Nather und Dr. H. Schützler
Wiener klinische Wochenschrift 39. Jahrgang, Nr. 41

人類ノ癌腫病理學ニ於テ、ソノ實驗的研究ハ、今日一般ニ真正腫瘍ト認メラル、移植シ得ベキ鼠ノ癌腫ヲ用ヒテ行フ。從來ノ見解ニ從ヘバ、癌腫ノ移植ハ、生活能力アル唯一個ノ癌腫細胞ノ存在ニテ十分成功ストナサレシガ、更ニローダ・エルドマン (Rhoda Erdmann) ニヨリテ上皮細胞腫瘍ノ移植ニハ基礎細胞 (Stroma zelle) ノ存在、同時ニ必要ナルコト明ラカトナレリ。

サテ吾人ノ實驗ハ〇・一乃至〇二立方糲左鼠ノ筋肉内ニ注射シ、八日乃至十四日ノ間ニ、急激ニ生長シ遂ニ試験物ヲ死ニ至ラシムル腫瘍ヲ生ズルモノヲ原液トナシ、ソヲ種々ニ稀釋セルモノヲ長短各種ノ間隔ヲオキテ注射シ、對稱トシテ唯一回原液ヲ注射セシモノヲトレリ。カハル稀釋液中ニハ基礎細胞ハ十分ニ存在セシガ、結果ハ稀釋液注射ノ全例ニ於テ注射部ニ一過性ノ腫瘍ヲ見タルノミニシテ、真正ノ腫瘍ハ遂ニ形成サレズ、シカモソノ腫瘍ハ一ノ例外ナク暫時ニシテ消失シ、更ニ組織學的検査ヲ行ヒシガ單ナル炎症性組織反應ヲ認メタルノミナリ。

コノ實驗ニヨリテ、轉移形成ハ主トシテ癌腫細胞ノ量ニ從屬的ナルコト明ラカナリ。即テ、癌腫細胞ノ量ニシテ十分ナラバ只一回ノ注射ニヨリテ轉移ハ形成サレ、不十分ナラバ間隔ヲ如何ニシテ繰返ストモ轉移ハ形成サレザルナリ。(山根)